

1 調査日 令和5年10月31日（火）～11月2日（木）

2 調査の概要

10月31日（火）

（1）福岡おもちゃ美術館（福岡市博多区）

福岡おもちゃ美術館は、令和4年4月に、ららぽーと福岡内にオープンした施設で、福岡県産材のスギやヒノキをふんだんに使用し、木の温もりが感じられる体験・交流型のミュージアムとして、子どもたちや大人も木の素材に触れて感じ、成長できる木育を大切にしたおもちゃと遊びの空間を提供している。

滋賀県においても、林業および木材産業の持続的な発展や、滋賀県産木材の利用に対する意識の高揚を図るため、令和5年3月に滋賀県産材の利用の促進に関する条例を制定し、滋賀県産木材の利用を推進している。また、令和5年4月には『つなぐ「しが木育」指針』を策定し、あらゆる世代が木とふれあい、木に学び、木と生活することにより、暮らしと森と琵琶湖のつながりを理解し、豊かな心を育む木育の取組を進めていることから、滋賀県産木材の利用促進や木育施策の参考とするため、取組内容について調査を行った。



（2）JA全農ふくれん（福岡市中央区）

JA全農ふくれんでは、福岡市と連携して、下水から回収した再生リンを原料とした肥料「eグリーン」を開発し、令和4年度から販売を開始している。当該肥料は一般の肥料より2割程度安価なものとなっており、肥料原料価格が高騰する中、循環型社会も見据えた取組としても注目されている。

滋賀県においても、肥料価格高騰による農業経営への影響を緩和するため、化学肥料の低減に向けて取り組む農業者の肥料費を支援する取組などを行っているが、引き続き農業経営維持のための施策が喫緊の課題となっている。

そこで、価格高騰に左右されず、安定的かつ継続的な肥料原料の供給により農業経営を安定化する取組として、浄水施設と連携した地域循環型エコ肥料の製造等の取組について調査を行った。



11月1日（水）

（3）和白水処理センター（福岡市東区）

福岡市和白水処理センターでは、老朽化による施設更新に際して、全国に先駆けて、下水汚泥からリンを回収するためにMAP法（リン酸マグネシウムアンモニウムを結晶として取り出す方法）の技術を導入した施設を整備した。回収した大量の再生リンは、「ふくまっぷ neo」として新たに肥料登録を行い、JA全農ふくれんと連携により、肥料の商品化につなげている。

滋賀県においても、高島浄化センターにて汚泥たい肥の有効活用事業が実施されるなど下水汚泥たい肥化事業を推進していることから、本県の下水汚泥処理施策の参考とするため、和白水処理センターにて再生リンを下水汚泥から回収する事業について調査を行った。



（4）雨滝音田の棚田（金賞米直売所「雨瀧屋」）（愛媛県東温市）

令和4年に農林水産省の「つなぐ棚田遺産」に認定された雨滝音田の棚田では、各農家が美しい棚田・農村景観を守るとともに、ブランドの棚田米と美しい風景を軸に誇りあるふるさとを創出、地域を後世につなぐ取組を行っている。また、「雨瀧屋」では、ブランド化された棚田米「穂田琉」の精米や販売、ホテルの里づくりへの尽力など、地域の魅力を向上させる活動を展開している。

滋賀県においても、農家の高齢化や担い手の減少等により、年々耕作放棄が増えている棚田地域の保全をするため、しが棚田ボランティア制度「たな友」やしが棚田トラスト制度によりボランティアや寄附金を募る活動を推進するとともに、令和4年12月には「滋賀県中山間地域振興の手引き」を策定するなど、中山間地域における農業維持等の施策を展開していることから、その参考にするため中山間地域の農地維持や魅力向上の取組について調査を行った。



(5) ITOMATI ホテル0 (株式会社アドバンテック) (愛媛県西条市)

株式会社アドバンテックのサステナブル事業部では、創業地である愛媛県西条市において、環境に配慮したまちづくりモデル事業「糸プロジェクト」を展開している。その中で、令和5年5月にオープンした ITOMATI ホテル0は、環境負荷を抑える取組にかかる環境学習会「エネルギー説明会」を通じて、持続可能な環境社会に対する課題意識の啓発を行うとともに、プラゴミ削減の取組や、地域の循環の中で生まれる西条市ならではの農水産物を地産地消する取組を進めている。

滋賀県においても、第五次滋賀県環境総合計画において、琵琶湖の恵みといのちを育む持続可能で活力あふれる循環共生型社会を目指し、環境学習を通じた持続可能な社会づくりや、廃棄物の発生を抑制する3Rの取組、地産地消による滋賀の農作物の消費拡大施策等を展開していることから、それら施策の参考とするため「エネルギー説明会」や地産地消の取組について調査を行った。



11月2日(木)

(6) 株式会社 サイプレススナダヤ (愛媛県西条市)

株式会社サイプレススナダヤは、平成30年に、原木からCLT(繊維方向が直交するように接着した木材)までを一貫して製造できる工場を日本で初めて開設した。サイプレスとは「桧」の英語名であり、桧をはじめとした集成材の生産量が最大手の会社として、国産材の加工を促進し、CLTという新しい建築資材の普及を通じて、林業資源の好循環・高環境型ビジネスの確立を目指している。

滋賀県でも、平成28年に「滋賀県CLT等普及促進会議」が設置され、新たな木材利用を促進するとともに、令和5年3月には滋賀県県産材の利用の促進に関する条例が制定された。今年度は「琵琶湖森林づくり基本計画(第2期)」の改定が控えているなど、皆で支え育む森林づくりと県産材の利用促進施策が展開されており、県産材の利用促進施策の参考にするために、株式会社サイプレススナダヤの新工場「東予インダストリアルパーク」における製材一貫生産の取組について調査を行った。



(7) 吉原食糧株式会社（香川県坂出市）

吉原食糧株式会社は、明治35年の創業から百余年にわたり、香川県の食文化に立脚した製粉企業として、県産小麦の開発等に携わっている。中でも、「さぬきの夢2000」は、当時主流だったオーストラリア産輸入小麦に負けない品質を目指し延べ10年間の試行錯誤のもとに商品化され、その開発過程は、ドキュメンタリー番組「プロジェクトX」や書籍等にも取り上げられた。今では県民の9割に認知されるなどブランド化に成功しており、それ以降も、当該会社は「さぬきの夢2009」や「はるみずき」、「島の夢」など品種改良、開発に尽力された。2020年には、経済産業省「地域未来牽引企業」に認定され、県産小麦等で地域農産物の普及を図るとともに、新たな商品開発に向けた連携協定を県と締結するなど、当該会社は、地域連携の活動でも多くの実績がある。

滋賀県でも、令和3年から県産小麦「びわほなみ」へ作付けの切り替えが始まっており、今後地元地域との連携による地産地消の取組や販路開拓、ブランド化による知名度の向上等を目指していることから、施策の参考とするべくブランド化の取組や地域連携の取組内容について調査を行った。

